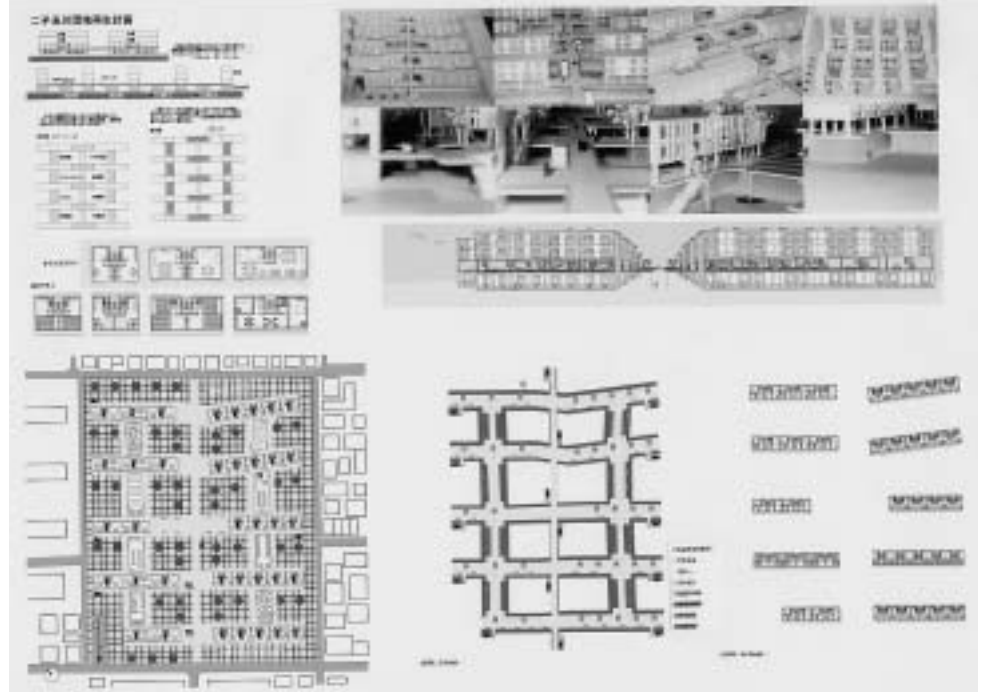


大井 裕介



田中 信也

**【第2課題】
大井 裕介**

昭和30年代に建てられた団地のほとんどが、機能的に配置された幾つかのboxの中に、より多くの住戸数を入れることがまず第一に考えられていた。団地再生計画として、住戸数を減らさずに、人と住戸と自然を融合させる全く新しい団地の形式を考え出した。

田中 信也

現状は、4層のよくある公団住宅で、それを少ない操作で、より楽しい空間に置き換えることを考えました。GLにSOHOを持ち込み、3、4層をSOHOで働く人の住居

と想定します。GLは地域の人々にも開かれていてほしいと考えたので、カフェやショールーム（SOHOの作品を展示）を配置しました。SOHOと住居部分が入り乱れた感じにはしたくなかったので、2層をヴォイドとし、各棟をブリッジで結び、植栽を施し、住民のためのパブリックゾーンとしました。

指導＝曾我部 昌史

老朽化した団地の有効利用の仕方を発明することが、この課題の目標である。敷地としては、昭和30年代につくられた典型的な公団の団地として、公団二子玉川団地を選んだ。RC造4階建ての建物が適度な隣棟間隔

を保ちながら並び、その間を40年近い時間をかけて育った木々が埋めることで生まれる雰囲気は、決して悪くない。初めは、何も手を加える必要はないのではないかというムードが強かったが、最終的には、この環境の良さをどう生かせるかという方向へと向かった。ここでも一部の作品しか紹介できないのが残念だが、これらの他に全体を公園化するもの、建物を部分的に撤去しながら新しい動線を導入するものなど、さまざまな切り口によるバリエーションに富んだ提案が行われた。ここで紹介するのは、その中でも最もコンセプトualな案と、最もリアリティのある案の二つである。大井案は、現状の団地の良さを

記憶として残しながら、新しい住居部分は全く別に設けるというものだ。団地だった部分には最低限のストラクチャのみが残され、公園化される。また、緑豊かだった外構部分は、半分埋まりながらべったり住居に埋め尽くされる。ちょうど住居部分と外構部分がそれぞれ入れ替わることで、団地の存在の仕方が浮上するというわけだ。田中案は大量の現実的な工夫によって支えられたものだ。敷地周辺の環境を分析し、階ごとの機能の割付、外構部分の調整、駐車場の設置、住居部分のバリエーションの追加など、さまざまな操作が加えられる。プレゼンテーションを含め完成度の高い案である。